上古中国語における「疾」「病」再考
——出土資料による

金卓

【要旨】

本文では、上古漢語において疾病を意味する「疾」と「病」の二文字を中心に、一部古人と近現代の学者の観点を基に、伝世文献中の手掛かりを出発点とし、出土文献などの新たな材料をふまえて、この二文字の関係について大胆な推測を試みる。そのために文字、音韻、訓詁および語彙使用といった角度から考えられる例証を行う。そして以上の新たな推測を総合的に考えることで、先秦の「疾」と「病」は同源であるか、もしくはどちらかが部分的に変化したものであるという可能性について検討を試みる。

【キーワード】

上古中国語；疾；病；出土文献

一、はじめに

古代漢語において疾病を意味する「疾」と「病」の二文字は、一般に互いに同義語もしくは類義語とされており、先秦時代において既に広く使われ、様々な文献に出現している。この二字の関係について、古今の研究者たちにより、数多くの例証と解釈とが行われてきた。

（一）古人による二文字の関係に関する解釈

古代の研究者たちは、疾病を意味する場合にはこの二字は同義語であると考える一方で、詳細に見た場合には、「疾」が小さな病気を、「病」はより重い病気を指していると考えた。

例えば、後漢・何晏の『論語集解』では包咸の注釈を引用し、「疾甚曰病。」と述べている。また許慎の『説文解字』では、以下のように解釈している：

疾：病也，从疒矢聲。　　病：疾加也，从疒丙聲。

段玉裁の『説文解字注』では、二字の関係について以下のようにまとめている：

「析言之則病為疾加，渾言之則疾亦病也。」

※細かく言えば「病」は「疾加」で、大まかに言えば「疾」は「病」である。

しかしながら、先秦の伝世文献における用例を、「軽いのは疾、重いのは病」と捉えるのには、いささか問題があるように見える：

『論語・雍也』

伯牛有疾，子問之，自牖執其手，曰:「亡之，命矣夫！斯人也而有斯疾也！斯人也而有斯疾也！」

※伯牛は病気になった。孔子が見舞いに行かれ、窓越しにその手を取って嘆いた、「亡くすことか、ああ天命なるかな。こういう人にこういう病気があろうとは。こういう人にこういう病気があろうとは。」

伯牛が重篤な病気を患い、間もなく亡くなるという時、孔子の嘆きの言葉は「有斯疾」であった。

『論語・泰伯』

曾子有疾，孟敬子問之。曾子言曰：「鳥之將死，其鳴也哀；人之將死，其言也善。」

※曾子は病気になって、孟敬子が見舞いに行った。曾子が言った、「鳥は死ぬまえに悲しげな声で鳴き、人は死ぬまえに善言を吐く。」

曾子が自ら死期を悟るほどの重病を、『論語』では「有疾」と記している。

同様に、「疾」で亡くなる用例は『左伝』にも多くみられる。春秋時代の著作のほかに、戦国時代の用例も多く残されている。また、異なる典籍や篇章において同一の事柄に対して、「疾」と「病」が互換可能であることも同様にうかがうことができる。そして以下の『呂氏春秋・知化』の例では、前後の句で程度の比較を行う際に、対照的に軽いほうに「病」を、重いほうに「疾」を用いている：

越之於吳也，譬若心腹之疾也，雖無作，其傷深而在內也。夫齊之於吳也，

疥癬之病也，不苦其已也，且其無傷也。

※越国は呉国にとって、心腹の病気の如く、発作が起きなくても、傷は深くて内部にある。斉国は呉国にとって、疥癬の病気の如く、治すことを心配しなくて害することもない。

（二）近現代の学者らによる一部の見解

王力は『古代漢語』において、常用の語彙について言及した際、このように述べている：「通常の病気は『疾』と言い、重い病気は『病』と言う。『論語・子罕』：『子疾病。』注：『疾甚曰病。』……しかし、現存の史料から見ると、『疾』と『病』が単独で用いられる際には全く違いはない。例えば、重病は『病篤』とも『疾革』とも言うことができる（革の音は jí で、『亟』に通じる）。」

王彤偉は『「疾」軽「病」重質疑』において以下のように述べている：「『疾』・『病』という二つの言葉は、誕生した時期こそ異なるものの、『疾病・病気』という意味では同義語である。古代漢語研究においては、未だに軽いものが『疾』で、重いものが『病』であるという見方が流行しているが、実際にはこの見方は先人の注釈に対する一種の誤解である。中国の伝統文献・訓詁専著・医学文献・仏経文献等の文献を漢語史の角度から統計分析を行えば、『疾』と『病』に程度の違いはないことは明らかであり、『疾』は小さな病のみならず、重い病気を表すことも可能である。また、『病』は重い病気のみならず、小さな病を表すことも可能である。二つの言葉は別々に用いられる場合に相違がないだけでなく、併用される場合でも同様である。」

この二字が完全に同義であるかどうかに関して、未だ学界でも見解が大きく割れているが、実際の用例中では病状の重さによる違いはないという可能性に多くの学者は気づき始めている。これは、一部の人の観点を代表していると言えよう。

（三）研究の材料及び意義

学界において未だ見解が大きく割れているということは、さらなる検討

を行う価値と意義があるということである。

検討を行う前に、必要な資料を分類する必要がある。筆者はまず研究の資料を大きく二種類に分類する：

まず一種類目は、伝世の先秦両漢時代の著作を主とする資料である。これらの資料の特徴としては、その字句が表す意味に対し人々が比較的大きな共通認識を持っている一方で、当該テキストの元の字形に関する情報を入手できないことが挙げられる。（一方、この類の資料の中には、一部特殊なもの、例えば『説文解字』のような字書も存在する。）

二種類目は、原始的な字形の特徴を見ることのできる資料であり、例えば甲骨文や金文、そして近年重要視される各種出土文献である。しかし、伝世資料と比較した場合には、この類の資料は、内容を参照したり比較したりできる伝世文献が存在しない場合もあり、釈読の上で見解が割れやすいという問題がある。

筆者は、「疾」と「病」の関係を検討する際に、慎重さを期すため、常に二種類の資料を並行して別々に扱い、できる限り混同しないようにするという態度を保ち続けるべきだと考える。つまり検討や分析を始める前から、伝世文献中の「疾」と書く用例を、出土文献における「矢形に従い、且つ疾と釈読する」字形と同じものだと、先入観を持って考えてはならないということである。

近年、出土文献の公表が増えたことにより、同義語や類義語を分析しその由来を検討するための新たな参考資料が徐々に増えてきていると言えよう。さらに過去の伝世文献と比べた場合、出土文献には文字の原始的な字形の情報が保存されており、後世の人々による文献の整理や書写の過程で生じた改変や誤りといった要素が除かれ、当時の当該地域でのリアルな文字の使用状況をより容易に再現することが可能である。

（四）その他の先秦伝世文献において考えられる特徴

1. 名詞と動詞の違い

疾病の意味を表す場合には、「病」字は動詞として用いられることが多く、「疾」字は名詞とみなされることが多いようである。

2.「疾病」のように二字を連用する際の二種の状況

一つは、現代漢語の二音節語「疾病」に近いもしくは同じで、疾病を意味する際に名詞として使用される例である。もう一つは、病状の悪化を意味する主述構造のフレーズに類似しており、例えば『論語』の「子疾病」、『左伝』の「公疾病」といった用例が挙げられる。

包咸の注解に従うならば、二つ目の使い方では、「疾」は名詞で疾病を意味し、「病」は動詞で病状が悪化することを意味していると理解できるだろう。しかし筆者は、こういった用例に対して、他の解釈をすることも可能だろうと考える。たとえば、類似の表現として、伝世文献に「病病」「病疾」「病篤」「疾革」などといった用例があり、「疾」を程度を表す副詞と解して、「疾病」を「急病」として理解することも可能である。

これについては後ほど改めて検討する。

二、本文

(一) 伝世字書を中心に展開される推論

ここでは、一種類目の材料における比較的特殊なもの、つまり『説文解字』を代表とする字書に着目し、一つ目の推論について述べる。『説文解字』の編纂の目的は、許慎が序文でも述べているように、「解謬誤、曉學者、達神恉」にある。編纂目的そして字書としての性質からみて、『説文解字』には二つの特徴があると考えられる：

(1) 列挙した文字について解釈を行う際には、なるべく字形から出発し、当時の一般的な意味にはこだわらず、文字の本義について分析、そして由来の探求、再現を試みている。

(2) 文字について解釈を行う際には、注釈のために使用される語句は、当時の比較的明快で、実際の言語習慣に近いもののはずである。

では、『説文解字』において、「疒」部や各種疾病と関連する文字を見てみよう。

文字	部首	原文
疾	疒	病也。从疒矢聲。
病	疒	**疾**加也。从疒丙聲。
痛	疒	病也。从疒甬聲。
……		病也。
疵	疒	病也。从疒此聲。
痟	疒	酸痟，頭痛。从疒肖聲。『周禮』曰：「春時有痟首疾。」
癘	疒	惡**疾**也。从疒，蠆省聲。
痔	疒	後病也。从疒寺聲。
痹	疒	溼病也。从疒畀聲。
痋	疒	動病也。从疒，蟲省聲。
疢	疒	熱病也。从疒从火。
癉	疒	勞病也。从疒單聲。
疸	疒	黄病也。从疒旦聲。
痰	疒	病息也。从疒夾聲。
疫	疒	民皆**疾**也。从疒，役省聲。
瘥	疒	瘉也。从疒𡢁聲。
瘉	疒	病瘳也。从疒俞聲。
瘳	疒	**疾**瘉也。从疒翏聲。
藥	艸	治病艸。从艸樂聲。
眼	目	目病也。从目良聲。
鼽	鼻	病寒鼻窒也。从鼻九聲。
癲	癲	病臥也。从癲省，练省聲。
砭	石	以石刺病也。从石乏聲。
婥	女	女病也。从女卓聲。
醫	酉	治病工也。殹，惡姿也；醫之性然。得酒而使，从酉……

（論述がしやすいように、文字の順序について多少の調整をしており、また注釈が類似している文字を一部省略している。）

『説文』の原文において、疾病を指す場合には「病」字が使用される場合がほとんどで、僅かな字例でのみ「疾」字が使用されていることが明らかである。そのうち、「病」字そのものに対して注釈する際には、「病」字を避けるのが自然であり、「疾也」としたのだと考えられる。また、「瘳」字の注釈は「疾癒也」とされているが、同義の「癒」字の注釈である「病瘳」との差別化を図るため意図的に行った可能性が考えられ、これと類似した注釈上の差別化を図ったと考えられる文は『説文』においても数多くみられる。「痟」の解釈では『周礼』を引用しているが、注釈自体には、先秦文献で頭痛を意味する常用語彙である「疾首」「首疾」を用いておらず、より通俗的な「頭痛」を用いている。表に示したこのようないくつかの例外を除いて、『説文』の注釈文に見えるその他の「疾」字の用例は、すべて速度が速いことを意味しており、ここでは列挙することはしない。

したがって、後漢時代の口語において、唇音陽声韻の「病」字を用いるのが圧倒的に主流であり、「疾」字は二音節語「疾病」及び一部の慣用表現や熟語等においてのみ使用されていたのだと考えられる。口語が常に変化し続けている一方で、文語においては、古人は長い間一貫し、先秦口語から生まれ、先秦両漢の伝世文献によって保存されたものと文法や語彙が類似する文言を規範的な文語とみなしてきた。これは歴史的な漢語の変遷の特徴の一つである。ゆえに、文語の変遷速度は口語よりも遥かに遅い。したがって、その後の二千年間にわたって、「疾」字は単独で疾病を表し、様々な文章や著作にも使用されてきたが、これは後世の人々による擬古的な使用で、実際の口語上の習慣や特徴を反映したものではないと考えられる。時代的な距離の隔たりが非常に大きいため、証拠として不十分な可能性はあるが、口語において一貫して「病」で疾病を表すことは、現代漢語と一致しているのみならず、現在の中国における主な方言とも一致している。

また、以上からわかるように、漢代の人々にとって「病」字は主に疾病という意味で用いられていた。それにもかかわらず当時の人々が「疾」字をこそ最初に疾病を表す字であると考えていたとするのなら（この観点と

異なる筆者の推測は後述)、たとえその「本義」が彼らの言語習慣になかったものであっても、「病」字の本義や変遷を分析し、解釈しようと試みたであろう。(「疾」字が「病」字よりも古い、もしくはより早い時期から疾病を指していたという観点は、夏業梅が『常用詞「疾」与「病」的演変研究』において、「初期は『疾』が常用語彙とされたが、……戦国以前は『疾』が常用され、戦国以降は『病』が常用される」と指摘し、また前述の王彤偉も、「『疾』、『病』という二つの言葉は誕生した時期が異なるが、『疾病』という意味では同義語……」と指摘している。つまり、王彤偉も「疾」が「病」より古いと考えていることがわかる)。一方、包咸の注釈の「疾甚曰病」は、『左伝』の「公疾病」や『論語』の「子疾病」などといった、病状の悪化を意味する用例における「病」字の役割に対するまとめである可能性が高い。許慎にとってみれば、包咸の注解は無視できないものである一方、先秦文献における実際の用例について「軽いのは疾、重いのは病」とは言えないことに気づいたか、あるいは「疾病」という二文字が名詞性か動詞性かによって使用される際に多少の違いが生じることに気づいたために、「病」字の本義を折衷して「病加也」としたのだと考えられる。筆者は、ここの「加」字は病状が軽いものから重いものへという程度の変化を意味する「疾甚」と同義して解することができるだけでなく、「増えて生じる」「疾病が身体に加わる」などの角度から理解することもできると考える。つまり、病状が無から有に転ずることを指す動詞である。

また、「疾病」という二字の最初の字義は何であれ、漢代の学者たちが二字に対して注解を行ったことで、ある意味では、その用法に対し整理と再定義がなされたのだと言える。後世の人々が文を書く際に、故意にか無意識にか、程度の違いの意味を表現している可能性がある。

しかし、言語習慣の影響力はより強大なものである。後世の正史類の著作において、「疾」と「病」は共通して疾病を意味し、程度上の区別は見られない。つまり、段氏が言う「渾言」の状況は多々見られるが、「析言」の用例はまれである。これは、言語習慣上、漢代以降は、実際には「病」で統一されており、「疾」字が疾病を意味する用法は言語的に生命力が見

られないということを、別の側面から証明したと考えられる。

（二）甲骨金文と伝世文献の状況を考慮に入れた議論

夏業梅は『常用詞「疾」与「病」的演変研究』において、「疾病を意味する場合、上古から既に『疾』と『病』という二つの言葉が使われており、また二つの言葉は実際の言語使用において完全に同義である。初期は『疾』が常用語彙とされたが、現代漢語では『病』及び二音節語の『疾病』が常用語彙とされている。この変化は戦国時代に出現したもので、戦国以前は『疾』が常用され、戦国以降は『病』が常用される。」と指摘している。

しかし改めて振り返ってみると、「戦国以前は『疾』が常用され、戦国以降は『病』が常用される」とは、真実なのだろうか。その中には、伝世文献の用字や通仮字によって生じた先入観に影響された部分がないだろうか、あるいは伝世文献自体の用字が、後世の人々によって意図的に整理されたことで違いが生じた可能性はないだろうか。我々は、字形を見ることのできる甲骨文・金文・出土文献などの資料から、再度分析を試みた。

甲骨文において、「疒」と「矢」に従う「疾」字は見られない。現在一部の学者によって「疾」と釈される文字は、甲骨文では二種類の字形に分かれている。一つ目は人が牀で横になっている状態に見える「 」字、二つ目は人の脇の下に矢の形を加え、「大」と「矢」に従う「 」字である。卜辞における用例から見て、一つ目の字形は病気になることや疾病を指し、二つ目の字形は疾病と無関係であるとの主張がなされている。後者は西周晩期の毛公鼎に見える「 」の字に似ていることから、鼎文「啓天 畏」は『詩経』の『大雅·召旻』の「旻天疾威」に対応している可能性がある。故にこの字が速度の速いことを意味する「疾」の初文であると主張する学者もいる。 しかし筆者は、上述の用字の例を見るかぎり、厳密に言えば「」字を「疾」字でなく「病」字の初文と見なすことも、妥当ではないかと考える。

商代の金文において、「疾」字は未だ見られない（『商代金文全編』参照）。「疒」に従う「疾」が金文に現れるのは、戦国晩期の十三年上官鼎において人名に使われた時であった。晋系文字の璽印及び盟書材料には、「疒」

に従う「疾」と「病」はいずれも「去疾」「病己」などの人名として出現している。秦系の出土文献において、例えば戦国晩期の睡虎地秦簡には「疾」と「病」という二字に形の似たものが出現しており、いずれも疾病を意味し、且つ「疾」と「病」の用法と字形は既に漢代のそれと概ね一致している。また、睡虎地秦簡における「疾」「病」という二字からも、同様に名詞と動詞の性質による違いが表れている。例えば：

戊己有疾，巫堪行，王母為祟，得之於黄色索魚、堇酉。壬癸病，甲有閒，乙酢。

※戊・己の日に病気になり、祟る者は巫堪と王母で、黄色索魚と堇酉から得た。壬・癸の日に重くなり、甲の日に好転し、乙の日に回復した。

（『日書』甲種・72号簡・表側）

一宅中毋故而室人皆疫，或死或病。

※一つの部屋の中は、故無くして全員が疫病にかかり、或いは死んで、或いは病気になった。

（『日書』甲種・37号簡・裏側）

以上述べたように、疾病を意味する場合には、「疾」字が「病」字よりも先に出現していると断言することは非常に困難である。

このほか、「疒」と「矢」に従う「疾」字の誕生について、以下のようないくつかの推論が立てられている（段玉裁、羅振玉、于省吾、王力等の諸家の観点からまとめた）：

(1)　人が牀に横たわる字「 」は疾病を指しており、人に矢の字「 」は意味こそ異なるものの「矢」声に従っている。二文字の発音は同じかもしくは類似しており、そのため混用が見られ、後世では一字に合流し、「疒」と「矢」声に従うようになった。

(2)　矢の速度が非常に速いことから「矢」に従い、急速であることを意味する。

(3)　矢は人を傷つけることができることから、怪我や病気の意味へと派生し、さらに外傷や傷病から派生して全ての疾病を広く指すようになった。

学者たちが「疾」字の変遷過程について構想を試みる際には、往々にしてこれらの推論を併用することで、この字の大まかな発展の道筋を再現している。しかし筆者は、以上の各種推論は、互いにある程度の排他性を持ち、簡単に併用すべきではないと考える。これらの推論を併用するにあたっての最も大きな問題は、スムーズに解釈できるという理由で「矢」という構成要素を過度に使用したことである。つまり、速度が速いという意味を説明するために、弓矢が速いという理由で「矢」を義符として解釈したり、二種類の字形の併合の原因を説明するために「矢」を声符として解釈したり、疾病という意味の由来を説明するために、矢が人を傷つけることによる外傷や怪我から一般的な傷病という意味へ派生したと解釈したりしている。これらの推論のうち、厳密な推敲に耐えられるのは、「矢が義符となって速度が速いという意味へと派生した」というもののみであると筆者は考える。一方、『左伝』など早期の伝世古典では「心疾」といった用例が既に出現しているが、外傷を指す用法は見られず、また「心疾」は心理的な病か心臓の疾病かに関わらず、弓矢などといった鋭利な武器による怪我と無関係である。したがって、「疒」と「矢」に従う「疾」字について、現在見ることのできる最も早い用例は外傷との関係性が薄く、外傷を中心とする推論は明らかに信憑性が低いと考えられる。筆者は、二種類の甲骨文の字形は音が相似しているため時に混用されている可能性があると考えるが、一方でこれだけで「矢」声に従うという結論を出すのは無謀である。段玉裁も「矢能傷人，矢之去甚速，故从矢會意，聲字疑衍。秦悉切，十二部。」と、同じ観点から主張している。後世ではこの字を「秦悉切」で読んでおり、「矢」字とは発音も異なっている。確かに漢語では一部の構成要素が声符であると同時に、意味を表す機能も部分的に兼ね備えてはいるが、このような現象は、言語において発音が近い一つの語源から徐々に関連する異なる語彙に分化していった結果生じることが多いのである。例えば「戔」に従う「淺」「賤」「箋」といった字には、いずれも細くて小さいという意味が含まれており、これに基づいて宋の人たちは「右文説」を主張し、現代の学者たちも似たような角度から同源語の研究を試みている。しかしながら、「矢」という構成要素からは類似の語彙集合は生まれてい

ないようで、したがってこの類には属さないと考えられる。よって、「矢」は会意の義符として使用されている可能性が高く、声符ではない可能性が非常に高い。「矢」がもし会意の構造であれば、甲骨文字の「 」における特殊な傾斜状態にも対応する。したがって、「疒」に従う「疾」が仮に「大」と「矢」に従う「 」字と関連しているのであれば、「疾」字の「矢」も義符であるはずだ。

さらに楚系出土文献の状況について見てみよう。そこでは「疾」と釈される字が圧倒的に主流であり、「丙」に従う「病」字はほとんどみられない。ただし、『老子』のように、伝世文献と参照して読むことができる出土文献において、「疒」と「方」に従う字がみられ、伝世文献の「病」字に対応するようである。「丙」と「方」という二つの声符から考えれば、いずれも唇音陽声韻であり、発音が非常に近いものである。

しかし、楚系出土文献の「 」という文字は、果たして「疾」字に対応しているのだろうか。この点について検討するためには、まず楚系文字における「矢」と関連する字の系列について検討する必要がある。

（三）楚系文字「矢」の二種類の字形

楚系文字において、「矢」の形にはよくみられる二種類の書き方がある。ここでは、この二種類を「A類」と「B類」とする。

矢A類は「 」形とする：他の系統の文字における「矢」字の書き方に類似している。

矢B類は「 」形とする：逆さになった「 」から発展してできたもののようである。

「矢」字を単独で使用する際は「 」の形、構成要素として使用される場合は「 」形も「 」形も見られる。また楚系文字において、「内」字は「 」と書かれる。つまり、「内」字は構成要素として使用される場合の矢A類の「 」と書き方が同じである。

現在のところ、もともと一つであった「矢」字が、楚系文字においてこの二種類の書き方に分化した原因について詳細に検討した研究は未だ存在

していない。これについて、筆者は以下の二種類の推論を立ててみたい：

1. 用字における区別のしやすさ及び文字識別上の慣性によるもの

楚系文字において、「 」は「内」字と形が同じなだけでなく、「夫」や「大」などといった他の一部の字形にも視覚的に近い。そのため、歴史上のある時期において、識別しやすくするために、楚系文字において単体で使える「矢」字を上下逆さまにし、そうすることで区別を図ったのだという考え方である。しかしながら一般の文字使用者は、研究者や文字学者とは異なり字形の起源について把握することは珍しい。これは現代の人にも、古代の一般人にも言えることである。そのため、当時の一般人にとって、字義的に「弓矢」や「矢を射ること」と明らかに意味的に関連づけることのできる字、例えば「身」と「矢」に従う「射」字や、弓矢を表す「矰」字（すなわち一般の文字使用者にも、「矢」という構成要素が意味を表していることが明白に伝わる文字）も、その「矢」の部分は影響を受けて逆さまの「 」形に書くようになった。

一方、「侯」「矣」「疾」などといった字は、発音的にも意味的にも直感的に「弓矢」や「矢を射ること」と関連付けるのが困難であるため（戦国時代の人々は「諸侯」という語をよく使用するが、そのことにより、「侯」の本義である「標的」についての意識が弱くなったのだと筆者は考えている）、一般の文字使用者にとって、「矢」は単に頭で記憶され、習慣のままに使用している文字の構成要素にすぎないのである。そのため、単体で使用される「矢」字と同じように逆さまになることなく、依然として「」と書くのである（構成要素として字を構成するのであれば、逆さにならなくても、文字の形が同じであることによって識別に支障をきたすような問題も起こらないのである）。

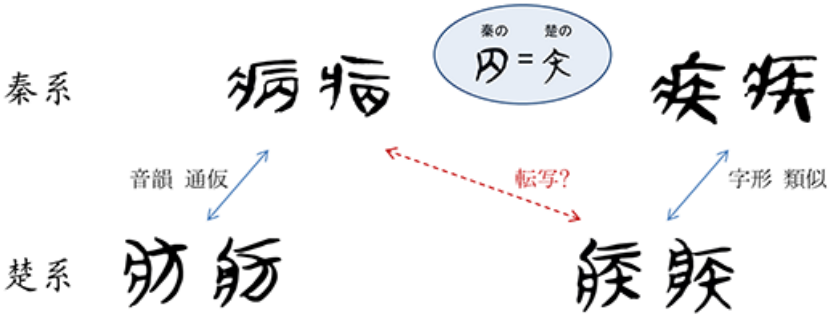
2. 書写構造の美しさによるもの

単独もしくは構成要素が左右に並ぶ構造を持つ字は「」の形で書かれる。一方、構成要素が内外もしくは上下に並ぶ構造の字では、字形の美しさを考慮し、「」の形を逆さにしたか、もしくは元々の矢先が上を向

く「矢」形の書き方のままにしたのである。

（四）同形の「矢」と「内」により引き起こされた「疾」と「病」の混同に関する推測

前述の楚系文字の「矢」形と「内」字が同形であるという論点に立ち戻り、筆者はここで大胆な仮説を立てることにする。戦国時代においては、各国で文字の形が異なっており、同時に各国間で文化や情報の交流が非常に密接であったと考えられる。仮に各系文字の書き方に触れることのできる古人の立場に立って考えてみよう。例えば、秦系文字と楚系文字の両方に同時に触れられる人は、秦において「内」を表す字形「内」にも、楚の「内」を表す字形「矢」にも触れることができる。そうするとその人の中に、「秦の「内」は楚の「矢」と一致する」という認識が生まれる可能性が高い。そしてその人が「病」と書く秦の「病」字を見た時、思考の慣性でそれを楚文字に書き換えると、図のような楚系文字の「疾」字「疾」に対応する字になる。下図に示す：



これにより、元々は意味的な関連しか持たない「疾」と「病」という二つの文字は、他地域の字形を導入したことで、字形的にも意外な対応関係が生じたのだと考えられる。このようにぴったりと符合することは、果

たして単なる偶然なのだろうか。さらに、この現象を裏付けるように、伝世文献と他系統の文字においていずれもよく出現する「疾病」の二文字は、楚系文字においてのみ、ほとんどが「疾」字で現れるのである。

（包山楚簡では「方」に従う「 」字も見られ、その多くは「心疾」というような用例である。これらの用例において、「」字は動詞、「疾」字は名詞として理解することが可能である。簡文については更なる研究が必要だが、ここの「」と「疾」字とは、字形・意味・品詞のいずれにおいても違いがあり、異なる二文字だということは明らかである。）

さらに、上述の内容とは無関係であるが、「疾」と「病」二字の字形が似ていることについて、後世の一部の特殊字体からもうかがうことができる。例えば、漢印の「呉去病印」において、その「病」字の形は「疾」に類似している。

字形変化に対する連想を助けるため、ここに図を添付する。

（『漢印文字徴』第七・十九）

上述の仮説は限られた状況における想像にすぎないが、それでも筆者は、楚系文字にこれだけ多く見られる「疾」字の中には、実は「疾」字ではなく「病」字と釈すべきものも一部存在するのではないかと、考えざるを得ないのである。あるいは、他の系統の文字において区別される「疾」と「病」が、楚系文字においては混同が生じていたのではないだろうか。さらに大胆に仮説を立ててみよう。後世の我々が厳密に区分している「疾」と「病」は、その実最初は同源だったものが、上述のような偶然のような書き換えにより、最終的に異なる二文字に分化したのではないだろうか。

上述の仮説を証明するために、楚系文字の中から、「 」に従う字が「病」と関連付けられる例を見つける必要がある。

（五）類似字形が「丙」に従う字として釈される例

『上海博物館蔵戦国楚竹書（七）』の『鄭子家喪』篇には甲と乙の二篇がある。そして二篇に同時に整理者が「」と釈す字が出現した。それぞれ以下のように書く：

甲本１號簡

甲本３號簡

乙本２號簡

乙本３號簡

四つの「悟」字が見られたのはいずれも「邦之悟」という語句であった。整理者は、これは「憂」を意味する「怲」字と読むべきだと主張しているが、陳偉『「鄭子家喪」初読』及び復旦大学出土文献与古文字研究中心研究生読書会は、この字は「病」と読むべきだと指摘している。陳偉は、「これまで見た楚簡における『病』はすべて『方』に従うものとされてきたが、これは『病』字のもう一つの書き方なのかもしれない」と併せて指摘している。

この四つの文字はいずれも、本来は「矢」と隷定すべき上に挙げた矢A類の「矢」形を有するにもかかわらず、整理者はそれを「丙」に従うとして隷定した。さらに陳偉と読書会は、その上で「病」と読むべきだと主張しているのである。

しかし、異なる見解を示す学者もいる。張新俊は『「鄭子家喪」𢡟字試解』において反論している：

現在我々が目にすることができる楚文字「丙」では、真ん中の部分が「矢」と書かれるようなことは一度もなかった。したがって、この点から見て、それ（甲本１號簡の字）を「悟」もしくは「𢡟」と隷定するのは非合理的である。この字の上部が従うのは「丙」でない以上、「怲」や「病」と読むことはできないのである。

張新俊氏の見解についても、上述した「矢と内の書き換え」という発想こそが、その非合理的な箇所を合理化できる一つの可能性であると、筆者は考える。「丙」字の形を、「一」の下に「内」があるという形に分解すれば（説文:从一入冂)、楚系文字においてはその構成要素である「矢」が「内」と同形であることから、当然「丙」の「一」の下の部分を「矢」と書く可能性が存在することになる。したがって、この字は「丙」に従い、且つ「病」と読むのは合理的な見解であると考えられる。

この他、『上博（六）・競公瘧』10号簡では、疒形や矢形に従う用例が見られた：

自姑尤以西聊攝以東，其人數多已。是皆貧**胠**（苦）約**㾓**（病）**瘕**（疾），夫婦皆詛。

※姑尤より西、聊攝より東は、多くの人が住んでいる。そこではみな苦しい生活をおくり、病に臥している者もいる。そのため夫婦はみな君を詛っている。

（整理者は「瘕」と隷定している）

整理者は、「貧**胠**（苦）約**㾓**（病）**瘕**（疾）」という句が『晏子春秋・内篇諫上』の「景公信用讒佞賞罰失中晏子諫」章の「民愁苦約病」に近いと指摘する。

陳剣は『「上博（六）・孔子見季桓子」重編新釈』で以下のように述べている：

簡文の「貧**胠**（苦）約**㾓**（病）**瘕**（疾）」という句は、「愁苦約病」と対応していることは間違いない。文献の伝播や変遷によるものもあり、意味が近いだけの問題ではない。『左伝』昭公二十年および『晏子春秋・外篇上』の「景公有疾梁丘拠裔款請誅祝史晏子諫」章は、簡文「貧**胠**（苦）約**㾓**（病）**瘕**（疾）」と同様、「民人苦病」に対応しており、「苦病」は「愁苦約病」の略語である。

「約」、「**㾊**」の二字も同様に、どちらも「勺」声に従い、発音が極めて近いか同じである。以上をふまえると、うち一字は衍文であることがわかる。呉則虞は「民愁苦約病」について、「約とは、貧困である。『論語』の『不可以久処約』に対し、皇疏では『貧困也』としており、これはその証である」と注釈している。この説には信憑性があると考えられ、したがって衍文に当たるのは「**㾊**」字であると考えられる。一部の版本においては、「約」字が後接する「疾」字に影響されて、「**㾊**（病）」に変化したのだと推測できる。さらにこの簡についていえば、「貧**胠**（苦）約**瘡**（疾）」と「貧**胠**（苦）**㾊**（病）**瘡**（疾）」という二つの簡が誤って組み合わされてできたものである。

郭永秉は『「競公瘧」篇「病」字小考』において、陳剣氏の見解を肯定し、このように指摘している：

まず、「**愿**」字は古代文字資料においては初めて見られたもので、何の字に相当するかについて結論を出すことは困難である。しかし、「**悟**」字は楚簡において多々みられるものであり、またいずれも上に「丙」、間に「口」、下に「心」という構造をしている……したがって、この字（前述した『鄭子家喪』の字）を「**悟**」と釈し、「病」と読むことは全面的に肯定できると考えられる。

この点が明らかになってから、再度『競公瘧』の「**[illegible]**」字を振り返ってみると、答えが見えてくる。この字は明らかに「疒（疒）」「**[illegible]**」声に従うと考えるべきであり、正真正銘の「病」字である。この字を「病」を釈することは、『左伝』や『晏子春秋』とも完全に一致している。よって、この簡文に関して、「文献の伝播や変遷によるものもあり、意味が近いだけの問題ではない」という陳剣氏の主張も、再度実証されたのである。

付け加えると、上博簡で度々見られる「**悟**」字は、果たして陳偉氏が主張するように「病」字のもう一つの書き方であるのかどうかについては、まだ断言することが困難である。陳剣氏は二つの著作において、この字（注：**[illegible]**）は『従政』篇では「猛」と読むべきだと指摘している。

以下では異論なく「丙」（丙の下に口）と隷定される楚系文字の用例を見てみよう。

包 165　 包 168　 帛丙 91

これらの例から、厳密に「丙」と隷定され、「矢」と混同されない字形は、その上の冠部分が四角くなっていることがわかる。

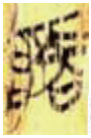
袁瑩は『戦国文字形体混同現象研究』（中西書局 2019）において、このように指摘している：

「内」字は、秦系文字において上部が「 」ではなく「 」とされていることを除き、その他の系統の文字においてはいずれも上部が「 」もしくは「 」とされている。例えば楚系文字における「 」と「 」、晋系文字における「 」と「 」、斉系文字における「」と「」、燕系文字における「」と「」が挙げられる。そのうち、上部が「 」の「内」は「矢」と混同されることはないが、上部が「 」の「内」は、それぞれ楚系文字において「 」と、晋系文字において「 」と、斉系文字において「 」と、燕系文字において「 」とされる「矢」と混同されると考えられる。

文字の変革に対して比較的保守的な秦系文字を除けば、四角もしくは頂点を持つ五角の上部の形が、二画の三角形に簡略化されることは、東方六国の文字においてよく見られる普遍的な現象であることがわかる。

さらに楚系文字における例を挙げると、例えば一般的に「 」と書かれる「内」字は、上博簡『緇衣』において、「 」という形になっている例が一つある。同篇『緇衣』における「宋」字は「 」と書くが、その他の楚系文字では通常「 」形になっている。

したがって、現在では多くの学者に「病」字として解読されている上述の『鄭子家喪』「 」と『競公瘧』「 」についても、そのうちの「矢」「口」に従う部分は、いずれも「 」の字形を基礎に、四角い冠を簡略化した書き方と見なすことができる。

さらに、「 」字は簡略化のためか、左側に一画が加えられている。このような書き方は「疾」にも見られるものである。例えば包山 2.221「  」

（恩　瘖）

また、楚系文字において「心」「口」を加えるかどうかは、場合によっては字義に影響しないために、「 」のような字形における「矢」は、冠を簡略化した後の「」から、さらに「口」をも簡略化したもの、つまり「」字を「」と「」の省略形に従う字と見なすことができるという推論を立てられるのではないだろうか。

（六）音韻的な関連性

字形的に上述のような大胆な推論を立てた以上は、音韻の角度からも根拠を示す必要がある。以下では、『清華簡（九)』における韻文『祷辞』について見てみたい。子居氏がこの簡文について韻読の整理を行っており、うち一部の簡文内容はこのように釈される：

皋！東方之白馬〖魚〗，曾孫某敢用鮮鬯、玄纁三束，以此兩女〖魚〗，與其美車馬〖魚〗，以畜於宗社〖魚〗，使此邑之三千夫〖魚〗、二千戶〖魚〗，使此邑之間於癘疾，毋有罪蠱〖魚〗。土沃則我毋與〖魚〗，土旱則我有臥雨〖魚〗。使此女之乘此美馬〖魚〗，以周此邑之野〖魚〗。

この句末の部分に「疾」の例があり、「疾」は上古において質部に入るため、子居氏は韻に該当しないと判断した。なぜなら、全文を通して質部の字で韻を踏む例がなかったからである。しかしながら、もしこの字を「病」と釈すことができるのであれば、「病」は陽部の字であり、前後の句中に一貫して現れる魚部の字と対応させることができる。魚部と陽部は上古音の中で主母音が同じで、互いに対応する陰声韻と陽声韻であり、韻を踏む際にも陰陽対転の関係にある。さらに簡文の前文にも、韻脚が陽部字である

場合が存在しており、しかも魚部の出現とも比較的密接な関係を持つように見える。

四方之萌，歸我彭彭，悠悠章章，蒙蒙襄襄。巫視龜筮，咸吉有慶。使此貞女，乘此美馬，以周此邑之野，使吾邑昌巨，抾其咎故。

萌　彭　章　襄　慶、陽部

女　馬　野　巨　故、魚部

この例から、「」字と「丙」に従う声符との間の関係性を十分に説明できるのではなかろうか。

（七）異源混同か同源分化かに関する思考

これまでの議論の中で、楚系文字における「疾」字の一部は「病」字として解読すべきだとの推測を示し、また音韻の面からも、一定の根拠を示した。しかし、これに関する筆者の発想は、楚系文字が「疾」と「病」とを混同したという小さな枠にとどまるものではない。既存の考え方から抜け出し、発想を転換することで「疾」「病」の二字は元々同源であるという大胆な仮説を立てられるのではないだろうか。「疾」「病」二字の起源については、その成立時期に関して明白に前後関係は証明されておらず、しばしば使用される人名の「去疾」や「去病」にその使用の類似性を見ることができる。また発音（声符か否か、出土文献での押韻の例）についても明白に区別することが困難である。また、秦が六国を統一した後、後漢の時代から、既に「病」が主流になっており、二字が競合するというような過渡的な状況も明確には見られない。より詳細に検討してみれば、我々が注目している「疾」「病」に関する多くの相違点は、いずれも先秦の伝世文献と戦国晩期の秦系及び漢代の出土文献との間に生ずるもののようである。一方、先秦出土文献と甲骨・金文においては、関連する字が元々はより多様な字形特徴を有していたことが見て取れるが、同時期のものと考えられる伝世文献においては、全て「疾」や「病」という単一な字形になっている。これは、戦国晩期の秦の人々そして後の時代の漢の人々が先秦の典籍対して整理を行った際に、無視できない影響を与えたということではないだろうか。すなわち、「疾」「病」の二字は、戦国時代に各地域の文献

を伝写する中で徐々に分化し、最終的に異なる二字になったのではないか、ということである。よって、伝世文献または晩期秦系文献において見える「疾」「病」に関する違いは、秦漢の人々がこの二字を再認識した後に、一定の規則に則って整理した結果であると考えられる。

このような文献の交流は、一般に言われるような自発的な地域間交流が行われたのみならず、秦による六国統一が進むに伴って、大量の六国文献が秦国に流入し、伝写されるという過程が存在したのだと考えられる。最終的には秦国で使用される字形で整理伝播される可能性が高く、この民間においても公式にも大量の文献が一方的に秦に流入したという過程も、軽視することのできない非常に重要な要素であると考えられる。これと対応して、上述の冠部分の字形のように、秦国は字形の変革に対して、東の六国と比べて比較的保守的であったことから、六国文献において既に簡略化され多様な形に変形した用字を書き換える際にも、識別できる文字を書き換え、識別できない文字を保守的にそのまま書き写すことで、元々同源の字が異なる規則で書かれることになったのではなかろうか。これも実際の過程においては非常によくある状況であると考える。さらに、伝世文献において古文字の字形が近いために古人が正確に書写できず、その結果誤りが生じ、それにより後世の人々が長い間その真意を正しく理解できず、近現代になって学者たちが詳細な考察と出土文献との対照を通して、ようやく誤りの根源をはっきりさせることができたということも多々ある。そして一般的に考えて、この状況とは逆に、戦国時代の各国の文字の形が異なるため、元々同じ字であるにもかかわらず、古人によって異なる字で書写され、そのために後世の人々がそれらを同義語または類義語として扱うことも、必ず起こる事象だとは言えないものの、合理性を備えた起こりうる変化ではある。筆者が本節で述べた「疾」「病」の二字が同源であるという推論が、その実例になりうるのかもしれない。

（八）その他の関連性

加えて、「疾」と「病」が同源字であるということを前提に置くと、音韻や字形における関連のほかに、さらに視野を広げて、「疾」「病」二字が

訓詁と通仮と語彙の用法の面においても、非常に大きな共通性とわずかな関連性を有することが見て取れる。

1.「疾」の訓詁の角度

例えば、「疾」字は古注において、さらに二種類の注釈が見える：

疾，力也。

疾、齊，壯也。

これらの注を如何に解釈するかについて未だ様々な議論が行われている。

しかし、これまで述べた内容を参照すれば、陳偉が「病」の楚系の新字形と見なした「悟」字について、陳剣はその著作で『従政』において「猛」と読むべきだと主張している。また、郭店老子甲本において、「酉」と「犬」に従う「猛」字が出現しており、整理者や多くの学者はそれを「猛」解釈している。

「蟲（蜚）蠆蠆它（蛇）弗蜇，攫鳥猷獸弗扣」（甲・33 号簡）

※毒のある蛇と蠍と虫は刺さなく、鋭い爪牙のある猛禽と猛獣は捕らない。

この部分は伝世文献『老子』における「蜂蠆虺蛇不螫，猛獸不據，攫鳥不搏」に対応している。

病、丙、猛は上古においてはいずれも陽部に属しており、声母はいずれも唇音で、発音が似ている。また、この字は伝世文献『老子』における「猛」と参照し読めることから、「猛」と釈する見解にも信憑性があると思われる。したがって、力也＝壮也＝猛也、疾＝病ということになり、説得力を有する仮説だと言えるのではなかろうか。

2.「疾」「病」二文字連用に関する分析

上でも述べたように、出土文献などの文字資料においては、「疾」もしくは「病」に関連する字に多くの字形が存在する。しかし伝世文献においては、それらの字形は全て「疾」と「病」という二つの文字に統一された。このことから、戦国や漢代の文字使用者による整理が行われたのは明らかである。整理者たちは完全にそのままの字形を写したわけではなく、一定

の規則と自らの理解に則って、「疾」や「病」をそれぞれ隷書化し書き換えた可能性が高い。(「疾」と「病」が同源であることについて想像を広げると、例えば「有」字の後もしくは「首」字の前に来る時を「疾」字としたために、「疾」の性質が名詞に偏り「疾首」などの固定表現が出現したのではないだろうか。)

「疾」「病」の二文字は連用することも可能である。主に二種類の使い方がみられる。

一種類目は同義連用である。この使い方は現代漢語における二音節語「疾病」の意味と一致している。

二種類目は連語としての使い方で、伝世文献において管仲が病気になるという内容に関する例について見てみよう。

『吕氏春秋・知接』

管仲有疾。桓公往問之曰:「仲父之**疾病**矣，將何以教寡人？」

『莊子・徐無鬼』

管仲有病，桓公問之曰:「仲父之**病病**矣，可不謂云，至於大病，則寡人惡乎屬國而可？」

『列子・力命』

及管夷吾有病，小白問之曰:「仲父之**病疾**矣，可不諱云，至於大病，則寡人惡乎屬國而可？」

『管子・戒』

管仲寢疾，桓公往問之曰:「仲父之**疾甚**矣，若不可諱也，不幸而不起此疾，彼政我將安移之？」

※（大意）管仲は病気になって、斉桓公が見舞いに行って問った、「仲父の病気はひどくなって、国政について教えてくれることはありますか。」

各文献において様々な使い方がなされている。「疾病」・「病病」・「疾甚」さらには「病疾」などで、意味的にはいずれも「疾甚」と捉えることができるが、用字が多様化した原因を特定するのは困難である。そのうち、「疾

病」の用例は他のところでも比較的よくみられる。また、上でも言及した王力氏の主張をふまえると、これに似たものとして、「病篤」、「疾革」といった使い方もある。これらの異なる用法は、編纂者などの書き手が「疾」と「病」の用法をあまり区別せずに使っていたからか、それとも彼らが最初に手にした管仲の物語を再現する原始資料そのものが、字形的により多くの可能性を有していたからなのか、多くの可能性を考えられる。

ここで、出土文献における一例を引用する。

『赤鵠之集湯之屋』

帝命二黄蛇與二白兔尻后之寢室之棟, 其下舍后疾, 是使后**㤅**疾而不知人。

（7 号簡と 8 号簡）

※上帝は二匹の黄蛇と二羽の白兎に后の部屋の棟木にいるよう命令して、后に疾病を散布させたので、それで后は病気にかかって人を知らないようになった。

……句（后） 、……句（后） 、而不智（知）人。

筆者は、後半において連用されている「矢」に従う二つの字は、伝世文献において病状が悪化することを意味する「疾病」「病篤」「疾甚」という意味の言葉に対応していると考える。

この二文字と、前述の関連するその他の「疾」字について、如何に理解すればよいか、詳細に分析する必要がある。

まず、字形を重視し、「心」部の違いを無視せずに考えると：

同篇において複数の箇所で使われている「心」を持たない「疾」字は、疾病や病気になるという意味により偏った言葉であると考えられる。

例えば、清華簡の整理者は「**㤅**」を速度が速いことを表す「疾」と解釈し、「心」のない二つの「疾」字を病気になることと解釈した。

したがって、「**㤅**疾」は「急疾」「急病」と理解できる。

しかし、これを伝世文献における「子疾病」「公疾病」「仲父之疾病矣」「仲父之疾甚矣」「病革」のような伝統的な解読方法に対応させて、後ろの字を程度が増すという意味で捉えようとすると、「心」の符号としての働きを無視し、「**㤅**」を前述の「疾」字と混同させて、疾病を指すというこ

とにせざるを得ないのである。

さらに、「疒」「矢」「心」に従う「[illegible]」は、前述の「矢」「口」「心」に従う「[illegible]」、「疒」「矢」「口」に従う「[illegible]」とも、実は密接に関係しているのではないかと考える。「[illegible]」字はあるいは「病」として、もしくは「憂」を意味する「怲」と通仮してとらえることができ、さらには「猛」と通仮して程度的に激しいことを意味することもできる。また、「[illegible]」も前述のように「病」の省略形の可能性がある。したがって、この句について、より多くの解釈が可能である（例えば、「使后【憂慮】【疾病】而不知人」や「使后【猛烈】【生病】而不知人」など）。

他に注目すべきは、出土簡文においては、同じ字を二文字連用する場合、また一つの連語において前後の文字に同じ構成要素が存在する場合には、重文符号を用いて表すことが多く見られるということである。この例で言うと、本来ならば、書き手が前の字を書き終えた後、重文符号を用いて後ろの字を省略することができる。しかし、ここではそのように処理されていない。これはつまり、書き手はこの二文字が同じ字ではないと判断した、もしくは、字形は似ているが、同一の構成要素を有しているとは見なされなかった可能性がある。

したがって、「疾病」二字を連用して病気が重いことを意味する場合、語彙全体としては意味が明白ではあるものの、個々の字を別々に解読する上では伝世古典の注釈通りであるとは限らないという点を主張したい。前の字が「疾」であるとは限らず、後ろの字が「病」であるとも限らず、ひいては後ろの字は程度が増すことを表す「甚」の意味であるとも限らない。この連用語彙を如何に解釈すべきかについて、さらなる研究が求められる。

3.「疾革」の「革」に関する考察

また、「疾革」の「革」字の特殊な用法についても、より深く検討するに値する点がある。

『説文』においては、

「竊」字の注釈に「廿、古文疾」と書かれてある。

「童」字の注釈に「廿、古文以為疾」と書かれてある。

（ここでは速度が速いことを意味する「疾」を指して用いている可能性がより高いと推測される。）

一方、「疾革」において「亟」と通仮する「革」は、通仮（音韻の面）で「疾」字と関係を有するのみならず（説文：亟、敏疾也。革、亟と通仮する）、字形的にも「革」は「廿」に従っており、すなわち『説文』で言う「古文疾」に相当する。

よって、「疾革」という語も、上述した「疾」のような混乱に陥ったように思われる。

これに限らず、

『玉篇』:「革，改也。」

『説文』:「更，改也。」

といった記述から、明らかに「革」と「更」も同義語である。

現在の「更」字は「庚」の如く読むが、『説文』において、その字形は「 」であり、「从攴丙聲」と解釈されている。

このことから考えれば、「疾」（廿）はまた訓詁的に、声符である「丙」と関連付けて考えられたのではなかろうか。

4. その他の関連性に関するまとめ

以上の議論をふまえた上で、より視野を広げて考えてみると、「疾病」の二文字は疾病を意味する場合にのみ関連を持ったり、文字の転写時にのみ類似したりするわけではなく、訓詁における通仮やと語彙としての使用の点においても、下の表のような一連の関連性をまとめることができる。

使い方		疾	病
名詞	疾病	各種の病気を指す	各種の病気を指す
動詞	憂う	問之民所疾苦（『史記』）	「怲」と通仮する。「憂也」
	物事にある消極的な気持ちを表す	疾其君者（『孟子』）	君子病無能焉（『論語』）
形容詞	程度の高さと激しさを形容する	急速 「力也」 「壯也」	「疾甚」 楚系用例、猛は丙と口と犬に従う 丙と心に従う用例、病と猛と釈する
派生	改也	「革，改也。从廿。廿，古文疾」	「更，改也。从攴丙聲。」

（九）甲骨文の二字に関する推測

前述のように、現在のところ「疾」字の起源に関するいくつかの解釈は、「矢」という字形に重きを置きすぎるという問題点があり、それぞれの解釈の間に矛盾が存在していると考える。浅学ながら、ここで「疾」の二つの字形の起源に関する新たな仮説を提唱したい。

過去に学者は「 」という字形を、急速を意味する初文と見なしたが、急速の意味でと解釈した場合には、「矢」字は理解できるが、「大」に従う「人」が解釈できなくなる。そこで筆者は、「疾」字が「力」や「壮」といった意味を表すことができる点をふまえ、「 」字を「猛壮」を意味する初文と見なすことができるのではないかと考える。古人にとって、日常生活において触れることができ、かつ膨大なエネルギーと威力を表すことができる物というと、弓矢が浮かぶ可能性が高い。弓を引くには大きな弾力による位置エネルギーを蓄積する必要があり、それが矢を放つ瞬間に大きな運動エネルギーへと変換され、矢が急速に射出される。この過程は強い力を容易に連想させ、「矢」という構成要素は力を表す符号として使うことができるのである。また、人という視点から考えてみると、ある人が強い力を有するかどうかを判断するのに、最もわかりやすい特徴は上腕である。例えば我々が強健な人を想像する場合に、最も容易に連想するのは強

い上腕二頭筋であろう。したがって、「矢」に従いそれが人の脇の下にあるというのは、非常にイメージのしやすい形であり、このような会意的な構造を通して、人が逞しく強いことを表現しているのだと考えられる。これで、「疾」が力を表すという意味の起源が解釈できるようになる。さらに、生き物がしっかりした動きで強い力を発するというところから、動きが速いことを意味する意味が派生されたのだと考えることができる。また、この字の発音は唇音を声母とし、鼻音韻尾を韻母とし、陽部に属する可能性がある。

一方、「 」字について、筆者は「疾」ではなく「病」の初文と見なすべきだと考える。もし「病」と発音するのであれば、楚系文字において「病」と「猛」がいずれも「丙」に従い発音を得るということも踏まえて、発音の近さに基づいて「」と「 」字の混用についても解釈することができる。そして、より後の時代において、この混同により「疒」と「矢」に従う字が生まれたとする理解も、より合理的なものになる。その場合「矢」は「」と「疾」字においては、いずれも義符としてのみ使われる。

三、おわりに

以上、上古漢語の「疾病」という二文字を中心に、様々な大胆な仮説を提唱した。これらの仮説は互いにある程度矛盾する部分が存在する可能性があるものの、出土文献など新たな材料が増えるにつれて、伝統的な環境において未だ解決できていなかった問題点についても、解決するのに十分なチャンスがあると感じている。そこでは古い枠組みを打破するための勇気が求められることがあり、既に確立されている学説に対しても、懐疑的な視点で再検討してみるべきである。筆者の拙論が、今後の研究に対して新しい視点をもたらすことができたのであれば、何より幸いである。

本文において筆者が立てた仮説を以下にまとめた：

① 一部の学者が既に主張する通り、先秦伝世文献において単体で使用される「疾」「病」の二字は、疾病という意味を表す際には同義語であり、程度の違いにおける差異はみられない。

② 後漢及び後世の漢語の口語において、疾病の意味を表す際には既に「病」字が主流になっており、疾病の意味を表す「疾」字は生命力を失い、固定表現や文語においてのみ使用されるものと考えられる。

③ 「病」を「疾甚」の意味で理解することは、後世の人々が古文の用例に対して誤解や再定義を行ったことによるものの可能性がある。『説文解字』における「疾加」解釈も、必ずしも「疾甚」と同様に扱ってはならず、程度的な深まりというよりは、疾病が無から有へ転ずることを表すことも可能であると考えられる。

④ 既存の「疾」字の起源やその変遷過程に対する推論の一部は、構成要素である「矢」に過度に重きを置いて解釈しようとしているように感ぜられる。個々の意味を単独で論ずるのであれば辻褄が合うのかもしれないが、それぞれを合わせて、変化の過程全体について解釈しようとする場合は、合理性に欠いているように見える。

⑤ 「疒」に従う「疾」「病」の二文字は、誕生した時期に前後の差がない可能性がある。また言語的に、先に「疾」字を使用していたのが、徐々に「病」字に取って代わられたということが果たして実際にあったのかについても、より多くの研究を通して証明する必要がある。構成要素である「矢」は声符ではなく、甲骨文における「人が牀に横たわる」という文字も、「病」の初文である可能性がある。

⑥ 楚系文字において、一部構成要素とされる「矢」の字形は、「内」字と同形であることにより、「疾」と「病」字の間にも地域間の転写による字形の対応関係が存在する。このような関係に基づき、先秦時期においてこの二字の字形にはより複雑なつながりがあり、部分的に混同、変化している可能性があることを主張する。

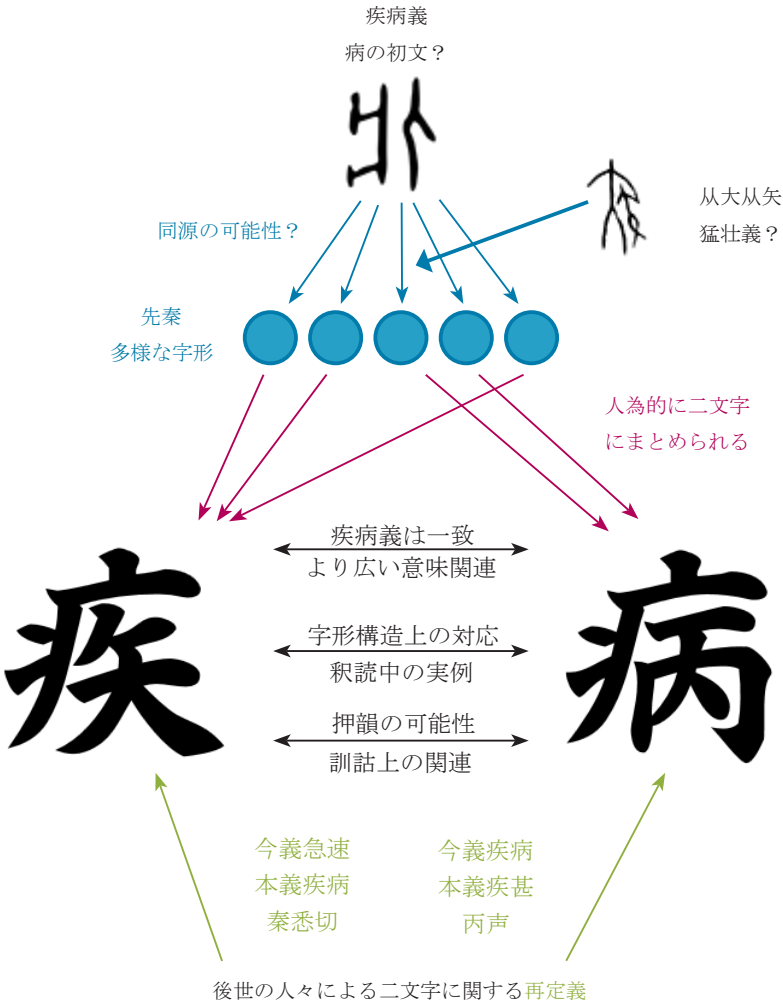
⑦ 一部の楚系出土文献の釈読、押韻資料から見て、構成要素「矢」と「丙」との間には字形的、音韻的により多くの関連性が存在する可能性がある。また構成要素「矢」は「丙」の省略形である可能性がある。

⑧　上の二つの推論に基づき、「疾」「病」の二字も同源である可能性が存在する。先秦時代においては、関連する文字には様々な字形が存在し、それが後世においてある種の事情もしくは人為的な整理によりまとめられて、その結果二文字に分かれて固定されたのだと考えられる。さらに、より大きな視点から見ると、「疾」「病」の二文字は訓詁、通仮、語彙の使用においても、より多くの関連性が存在しうることを示唆する手掛かりが見られる。

⑨　上の推論が成り立つのであれば、甲骨文における「大と矢に従う」字は「矢の力が人の腕にある」ことを表し、「猛壮義」の初文である可能性がある。また、力を奮い起こすという点から、動きが速いという意味が派生したのだと考えられる。「人が牀に横たわる」という形の甲骨文字は「病」の初文であるが、「猛壮」を表す文字と発音が近いため混用された可能性がある。さらに後世においてこれらの字が合流し、「疒」と「矢」に従う「疾」字になったのだと考えられる。

⑩　二文字を連用し、病状が悪化することを表す際の「疾病」という連語は、伝世文献において「疾病」「病病」「病疾」「疾甚」「疾革」「病篤」などの様々な言い方が存在するのみならず、出土文献においてもさらに多くの使い方が見られる。全体の意味は比較的明確ではあるが、個々の字に対する解釈については、前者は病気を指し、後者は病気が悪化することを指すという伝統的な解釈を完全に信用するわけにはいかない。この言葉に関しては更なる研究が求められる。

最後に、様々な角度からの自らの仮説を繋げてみることにした。文字でまとめるとかなり複雑で理解しにくい可能性があるため、図によるまとめを試みた。


疾病義
病の初文？
同源の可能性？
从大从矢
猛壮義？
先秦
多様な字形
人為的に二文字
にまとめられる
疾病義は一致
より広い意味関連
字形構造上の対応
釈読中の実例
押韻の可能性
訓詁上の関連
疾
病
今義急速
本義疾病
秦悉切
今義疾病
本義疾甚
丙声
後世の人々による二文字に関する再定義

参考文献

于省吾．甲骨文字釋林．中華書局，1979
王力．古代漢語．中華書局，1999
袁瑩．戰國文字形體混同現象研究．中西書局，2019
丁山．釋𤸫．歷史語言研究所集刊，1928(2)
王彤偉．「疾」輕「病」重質疑．陝西理工學院學報（社會科學版），2005(03)
夏業梅．常用詞「疾」與「病」的演變研究．現代語文（學術綜合版），2012(09)

陳偉．《鄭子家喪》初讀．2008
(http://www.bsm.org.cn/?chujian/5121.html)
陳劍．《上博（六）・孔子見季桓子》重編新釋．2008
(http://www.fdgwz.org.cn/Web/Show/383)
張新俊．《鄭子家喪》「𢘅」字試解．2009
(http://www.fdgwz.org.cn/Web/Show/604)
郭永秉．《競公瘧》篇「病」字小考．2009
(http://www.fdgwz.org.cn/Web/Show/677)
子居．清華簡九『禱辭』韻讀．2020
(https://www.xianqin.tk/2020/03/31/933/)

左傳．欽定四庫全書本
論語．欽定四庫全書本
老子．四部叢刊初編本
莊子．四部叢刊初編本
孟子．四部叢刊初編本
管子．四部叢刊初編本
韓非子．欽定四庫全書本
呂氏春秋．四部叢刊初編本

晏子春秋. 四部叢刊初編本
列子. 四庫全書薈要本
史記. 武英殿二十四史本
說苑. 四庫全書薈要本
韓詩外傳. 四部叢刊初編本
世說新語. 四部叢刊初編本
說文解字注. 上海古籍出版社, 1988
十三经注疏. 上海古籍出版社, 1997

睡虎地秦墓竹簡. 文物出版社, 1990
包山楚簡. 文物出版社, 1991
上海博物館藏戰國楚竹書（一）. 上海古籍出版社, 2001
上海博物館藏戰國楚竹書（二）. 上海古籍出版社, 2002
上海博物館藏戰國楚竹書（三）. 上海古籍出版社, 2003
上海博物館藏戰國楚竹書（四）. 上海古籍出版社, 2004
上海博物館藏戰國楚竹書（五）. 上海古籍出版社, 2005
上海博物館藏戰國楚竹書（六）. 上海古籍出版社, 2007
上海博物館藏戰國楚竹書（七）. 上海古籍出版社, 2008
上海博物館藏戰國楚竹書（八）. 上海古籍出版社, 2011
上海博物館藏戰國楚竹書（九）. 上海古籍出版社, 2012
清華大學藏戰國竹簡（壹）. 中西書局, 2010
清華大學藏戰國竹簡（貳）. 中西書局, 2011
清華大學藏戰國竹簡（叁）. 中西書局, 2012
清華大學藏戰國竹簡（肆）. 中西書局, 2013
清華大學藏戰國竹簡（伍）. 中西書局, 2015
清華大學藏戰國竹簡（陸）. 中西書局, 2016
清華大學藏戰國竹簡（柒）. 中西書局, 2017
清華大學藏戰國竹簡（捌）. 中西書局, 2018
清華大學藏戰國竹簡（玖）. 中西書局, 2019
漢印文字徵. 文物出版社, 1978

商代金文全編．作家出版社，2012
包山楚墓文字全編．上海古籍出版社，2012

清華大學出土文獻研究與保護中心．http://www.ctwx.tsinghua.edu.cn/
復旦大學出土文獻與古文字研究中心．http://www.fdgwz.org.cn/
武漢大學簡帛研究中心．http://www.bsm.org.cn/
引得市網站．https://www.mebag.com/index/
中國先秦史網．https://www.xianqin.tk/

【付記】
本論文の作成において、北京大学の雷瑭洵さん、東京大学の市原靖久さんと指導教員の大西克也先生に様々な助言を頂いた。心から感謝申し上げます。

疾病に関係する文字は殷商卜辞において既に出現している。三千年以上前の人々は、占いなどといった方法で疾病の法則を明らかにしようとしていた。つまり、人類文明の発展の歴史は、不撓不屈の精神で疾病と戦う歴史であるとも言えるだろう。本文を執筆していた時期は、折しも新型コロナウイルスが世界中で流行していた時期であり、コロナ禍の一日も早い収束をもって、人類が新たに「疾病」に打ち克つことを心から祈っている。